金糸の煙草

3

金糸の煙草　3

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19127114

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊

ヨシ霊です。師匠総受けです。暴力描写は含む予定です。イジメや虐待を匂わせる描写があります。お好きな方は（問題の無い方は？）よろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

金糸の煙草　3

「ちょっとヨシフだけついてきて欲しい依頼あるんだけど、いい？」
ビルの屋上で霊幻を見張ってたら、また話しかけられた。
霊幻がタバコを取り出したのを見て、何となく察する。
「また胸糞悪い案件かよ」
「そゆこと」
また霊幻がシガーキスで俺の火を取っていく。
「１週間前から男子中学生が１人居なくなってる。そのころから不良の溜まり場になってる廃ビルで、霊が目撃されるようになった」
「……それって」
「たぶんイジメ殺された男子中学生の霊だろう、と管理者は言ってる」
「……」
「中には不良たちがまだたむろしてるらしい。警察も同行してくれるから生身の人間は気にしなくていいんだが……こういう案件の時はエクボが不良とか相手に容赦なくなることが多くてさぁ。もうボッコボコにするから困ってて」
「……俺も気分的にはエクボと同じだがな」
「でもヨシフは暴力振るわない。だろ？」
霊幻の俺を信頼する目が居心地悪い。
ふい、と逸らして、
「まあ、公務員だからな。前科になると困る」
嘯いた。
「霊障が結構起こってるけど、ヨシフ、結構強い悪霊でも大丈夫か？」
ほお。俺の実力の確認か。しっかりしてんな、コイツ。
「俺はほとんど悪霊と戦ったことはない。対人戦が専門だ」
「そっか。じゃあ危なくなったら不良達つれて逃げるから、そのつもりでいてくれ」
「オイオイいいのかよ」

「除霊は改めてモブなり芹沢連れて行けばいいからな。今回は不良の排除と死体の回収が出来ればいい」
「……」
コイツ、死体をガキどもに見せたくないんだろうな。だから多分、そういうの見慣れてる俺に頼んできた、ってことか。
「ひとつ借りな」
「ん、助かるわ。掃除でも草むしりでも居酒屋奢るのでも、俺にできることならなんでもやるから、何か望みを１つ考えておいてくれ。……破産しない範囲でだぞ！？」
……。
いやだからお前、そういうとこ！
「霊幻センセ、そういうの言わない方がいいぜ……」
「は？」
「もし俺が『ヤらせろ』って言ったらどうするんだよ」
冗談めかして、半分、いやちょっぴりだけ本気でケムリを霊幻に吹きかけながら言う。
霊幻はぱちくりと目を瞬いて。
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
いや何か言えよ！？！？
どうしたらいいんだよこの沈黙！？！？
「じょ、じょうだんだよ」
めちゃくちゃ本気みたいな感じになっちまっただろ！？あーもー！！
「……いいよ」
一瞬、時が止まった。
こちらを伺うように小首を傾げている、ベッコウ色のまつ毛がちょっと震えるのを瞬きもできず見つめていて。
「な、おまえ」

「冗談だよ。仕返し」
蜂蜜色をした瞳を細めて、挑発的に薄く笑う霊幻に喉が鳴る。
「さ、早く行こうぜ。遅くなると寝るのも遅くなる」
身体を翻す霊幻新隆に頭を掻きながらついて行く。
ハニートラップには慣れてるはずなのに、なっさけねぇ。
やっぱその。
『本気』の相手から食らうのは、威力が違うな。勉強になったわ。

※

「あ！？なんだよテメーら、ここは俺たちのナワバリだぞ！？勝手に入ってくんじゃねー！！」
色とりどりの髪色をしたいかにもな不良たちが、携帯ゲーム機を手に吼えてくる。
「おーい、こっちには警官がいるんだぞ、分かってるか？」
「うるせぇな俺らゲームしてるだけだろうがよ！」
「あのなあ、未成年がこんな夜遅くに出歩くのも、勝手に人の土地に入るのも、悪いことだからな？」
霊幻新隆か淡々と不良を諭している。
「それに……ここ、出るらしいぞ、男子中学生の霊が」
おどろおどろしく言う霊幻に。
「知ってんよ」
さらっと不良は返す。
へら、と不良たちはお互いに軽い笑みを交わす。
「だって俺ら──」
オ　オ　オ　オ　…
不良達の後ろに立ち上がる真っ黒な巨大な学生の怨霊。
「危ない！はやくこっちへ！」
こういう事態に慣れている霊幻が真っ先に動いた。
５人ほどいた不良の後ろに回り、避難を誘導している。
怨霊の手が振り上げられ、霊幻たちに向かって振り下ろされる。
「ヨシフ！」
霊幻に呼ばれてはっとする。

（ホワイトノイズ！）
白壁で拳から守る。
「離せよオッサン！タっちゃん、俺だよ、俺たちだよ、やっと会えた──」
不良の１人が涙目で怨霊に向かっていく。
「なあ、またモンハンやろうぜ。金ラー、お前が居ないと倒せないよ。タっちゃん、俺ら、もう一度会いたくて──」
怨霊が思いっきり口を開けて不良を飲み込もうとしたのを、霊幻がタックルして助ける。
「どうしたんだよ、タっちゃん、俺たちが分からないのか？」
「──ヨシフ、白壁を怨霊にぶつけられるか！？」
怨霊に今にも駆け寄ろうとする不良を抑えながら霊幻が叫ぶ。
「ああ！」
（ホワイトノイズ！）
白壁で締め付けるようにして怨霊を殴る。
１人の巨大な学生に見えていた怨霊は、バラけて建物中に広がった。
「やっぱり、悪霊の集合体だな」
「タっちゃんじゃ、無かったのか……？」
霊幻は眉をひそめる。
「お前ら、もしかして降霊の儀式とかしたか？」
不良達が顔を見合わせる。
「……もう一度、タっちゃんに、会えるなら、って……」
「……良かったら、詳しく話してくれないか？俺はこう言うものだ」
霊幻が名刺を出している。
「『霊とか相談所』？何これ、あやしー」
少し場が和む。
「お兄さん、俺らがアイツを殺したんじゃない、って言っても信じてくれる？」
不良のリーダー格が霊幻を値踏みするように言う。
「信じる」
霊幻はきっぱりと言い切る。

その不思議な揺らめく蜂蜜の水面みたいな瞳に、おもむろに不良のリーダーは口を開いた。
「タっちゃんはさ、元々このビルで１人でずーっとゲームやってたんだよ。なんか学校ではいじめられてて、家では虐待されてて、居場所が無かったんだってさ。で、そのゲームがたまたま俺らん中で流行ってたゲームだったワケ。俺らがなんとなくこのビルに来て、先客のタっちゃんに絡みながら実際一緒にやったらタっちゃんめちゃくちゃ上手くて、高ランクモンスターバンバン倒してくれるから、俺たち利用する形だけど、そこからまあ、ダチみたいになってさ」
霊幻は頷きながら話をじっと聞いている。
「このビル崩れやすいところがあって、あの日、タっちゃんはキーホルダーを落として、その床まで転がって行ったのを追いかけたんだよ。危ねえぞ、って言ったのに……大丈夫、俺たちから貰ったものだから、って手を伸ばした時に……床が崩れて……」
不良の唇が震える。
「一気に五階から一階まで崩れて……タっちゃん、瓦礫に埋もれてどこにいるかも分かんなくなってた。俺たち必死に掘り起こしたけど……首、首が、後ろ向いてて……」
そっ、と霊幻は不良の手を握る。
「どうしてすぐ警察に言わなかったんだ」
「タっちゃんの両親が、すぐ通報すると思ってたんだ。子供が帰って来ない、って。でもクソ親、行方不明届も出して無かったんだろ？」
「……その通りだ。学校の先生が家庭訪問して、田洲くんの行方不明を知って届を出した」
「だったら、俺たちが弔ってやった方が、タっちゃんも幸せなんじゃねえの？って思っちゃって」
不良達がふらふらと立ち上がり、俺たちをビルの一角に連れて行く。
そこには。
丁寧に弔われている、少年がいた。
部屋の真ん中にある大きなテーブルの上には綺麗な真っ白な布がか

けてあって、その上に学ラン姿の少年が横たえられている。胸元には大事そうにゲーム機を添えられて。
少年の身体の周りには沢山の保冷剤と花をつける雑草が手当たり次第に敷き詰められていた。
一部の花がまだ新しい。さっき供えたばかりなのだろう。
「……ここには少年の霊はいねえ。成仏してる」
俺が言うと不良が泣き出す。
「なんで成仏なんかしちまうんだよ……！イジメられてたんだろ、虐待されてたんだろ……！悪霊になって祟ってやれよ……！」
霊幻がその不良の背中をさする。
「素人の降霊術は雑霊を集めてしまって失敗することが多いんだ。コックリさんがいい例だな」
「だったら先生、タっちゃんを呼んでくれよ……！霊能力者なんだろ！？」
「……これだけ丁重に弔われて、成仏したんだ。意味分かるだろ？田洲くんは、きっと君たちに感謝してる」
不良たちは霊幻にすがりながら泣き崩れる。
「会いてえよ……！お化けでもいいから、悪霊でもいいから、もう一度、会いたい……！！」
霊幻は瞠目する。
目を開いて。
「死者には、会えない」
誰かが不良たちに言わなきゃいけないことを、言ってくれた。
「さ、このビルから早く退去しよう。悪霊の数が多すぎるから、ヨシフの能力と相性が悪い。だろ？」
ごめーさつ。俺のホワイトノイズは一回につき一本タバコを消費する。無数に近い各個撃破の敵との戦いには向かない。俺は肩をすくめて肯定した。
「タ、タっちゃんはどうなるんだ？あの親の元に返したら、どんな扱いされるか」
霊幻はふむ、とあごに手を当てる。
「不審死、と言うことで警察で解剖の上、葬儀をお願いできますか？もし殴打痕が出て来たら虐待の線で親をつついてみてくださ

い」
「お、俺たちがやったって言われるんじゃ……」
「人を殴ると殴った方もケガをするんだ。君たちにはそれが無い。だから大丈夫だよ。で、葬儀に彼らも参列できるようにしてもらいたいんですが」
不良がぽかんとしている。
「ええ？特別措置になるんですが……」
「まあまあ、またこういう表に出せない案件を格安で引き受けますから」
「ううむ、それを言われると……分かりました」
刑事が困ったように顎を撫でる。
「！ありがとう、ありがとう、先生……」
「うん。大丈夫だからな。……うん」
霊幻にすがる５人の不良を優しく撫でる優しい目の男は、菩薩のようで、聖母のようで。
不良を撫でる細い指は白枝を思わせ。
月光色した髪をジジジと照らす切れかけた蛍光灯が、聖歌隊がかざす蝋燭を想起させた。
こいつにはこいつにしかできないことがあって、それは確実に人を救っている。
そんな男を俺は心から尊敬し──渇望した。
そんな男を組み敷いて乱して愛を乞わせれば、さぞかし征服欲が満たされることだろう。
俺はそれを認識したからこそ。
その感情に強固に蓋をする。何度もバルブを締め直す。スパイ三原則を忘れるな。
俺が霊幻新隆を征服するとき。
俺は霊幻新隆に征服されるのだ。
警察に不良たちは連行されていき、俺たちはとぼとぼと霊幻新隆のアパートに向かう。
「お、月が綺麗だな」
かち、と霊幻が固まる。
……。

「いやそういう意味で言った訳じゃねぇからな！？なーんか、今日は綺麗に見えるなあ、って！」
「……ちょっと雨がふったからな。空気が綺麗なんだろ。……なあ、公園で一服していかね？」
途中の公園に寄って、喫煙コーナーで俺は新しいタバコに火をつける。
「火ぃくれよ」
霊幻が身を寄せてくる。いつもより距離が近い。
あ。

これ、いけるな。

と思ってしまったら、止まらなかった。
シガーキスしてくる霊幻の腰に手を回して、タバコの角度を変える。
キスを受けるように霊幻も顔の角度を変えたので、俺はタバコを灰皿に押し付けて霊幻の顎を指で持ち上げる。
霊幻は指にタバコを挟んで避難させ、俺の唇を受け入れた。
「ん……」
鼻にかかった声にゾクゾクと背筋が痺れる。
トーストみたいな味がする舌を深追いしようとした俺の胸をそっと霊幻が押し返す。
は、とどちらのものともつかない熱い息を吐いて。
「……俺んち来る？」
そう言われて、思わずもう一度口付けた。
「おいっ、人目が」
「……いいのかよ」
きゅ、と霊幻が俺のジャケットを緩くにぎる。
「何度も言わせるな、ばか」
「わ、るかった」
俺たちは公園のベンチから立ち上がって霊幻のアパートの方に向かう。
長年のスパイ活動で培われためちゃくちゃ冷静な自分と、心臓が破

裂しそうな勢いで鼓動してる自分で分裂しそうだ。ヤれる。ヤれる。霊幻新隆と、ヤれる。ヤれてしまう。嘘だろ。ラッキーだ。俺もタバコ、ラキストに変えようかな。いやそうじゃねえ。落ち着け。感情に蓋を。ダメだ、性欲には蓋が負ける。くそっ、もっと風俗に行っておけば。いや無駄だ、風俗の１００回は霊幻新隆の「ウチ来る？」の１回に圧倒的に勝てない。
つまりあれだ。
俺は恋をしている。
しかもタチの悪いことに、大人になってから初めての深刻な恋だ。
どうしてくれる、霊幻新隆。
ああ先輩たち、助けてください。
先輩たちは恋をした時、どうしました？え？スパイ三原則を見れば分かるだろう？
『恋人を作るな、必ず別れる』
つまり先輩達は恋心に逆らえずに恋人を作って、フラれてきたわけですね。ハハ。クソッタレ。
「コンビニ、寄るから」
顔を赤くした霊幻にぽそっと言われて飛び上がりそうになる。
コンビニのコンドームやローションのコーナーに連れて行かれて。
「……サイズどれ」
またぽしょりと聞かれてこっちも照れる。俺はＸＬを２箱取ってカゴに入れた。
霊幻はローションをカゴに入れて、照れ隠しにポテトチップスを３袋も上に入れていた。
「レ、レジにはヨシフが行ってくれよな」
……いいけどよ、俺にカゴを押し付けた霊幻が耳まで真っ赤にして店外に逃げて行ったら、『ああこの２人で使うんだな』ってバレバレだぞ。俺は別にいいけど。
「……」
「……」
無言のまま、２人でアパートに向かう。頭の中はピンク色だ。無言が逆にやらしい。
「俺、準備するから、ヨシフは先にシャワー浴びてて」

アパートの鍵を開けながら霊幻が言う。……慣れてんだな。ま、そうじゃないかなとは思っていたが。あれだけ超能力者にモテるんだ。それなりに関係を持ったことはあるんだろ。
俺がシャワーから出ると、霊幻が入れ替わりにシャワーに入る。
部屋で深呼吸をすると、ぶわっと甘苦い霊幻の匂いがしてクラっとした。この部屋に入ったのって俺で何人目なんだろうか。
あー。
恋人でもないのに、そんなこと考えてどうするんだよ、俺。ヤれるって喜んでたことだけ思い出そ。
「……お待たせ」
──白い。
腰にバスタオルだけ巻いた霊幻が目に眩しくて。
「あっ」
バスタオルをはぎとって適当にベッドに広げる。俺が使ってたバスタオルも同じようにして、押し倒した。
俺は確かめるように霊幻の身体を唇で辿る。
「……ああいう案件の時はさ、俺だって結構ヘコむもんでさぁ」
ぴく、と俺の愛撫に反応しながら霊幻が熱っぽく呟く。
「……めちゃくちゃに、して欲しい」
霊幻のその言葉に、かんっぜんに、蓋が吹っ飛んだ。
「……はは、こわいかお」
すり、と霊幻が俺の顔を両手で優しく包む。発情しまくった男の顔なんて肉食獣みたいにしかならねぇだろうよ、そりゃ怖かろう。
「よしふ……んっ」
がち、と歯が当たって情けねえ。
お互いヤニ臭い苦い唾液を交換して、流し込む。
「ん……ふぁ……」
霊幻が口の端からタラタラと唾液をこぼし始めたので、がばっと口を咬んで覆ってやった。
「ん……っ！」
唾液に溺れた霊幻がどん、と胸を叩いてくる。
耐え切れなくてこくん、と霊幻が混ざり合った唾液を飲み込んだのを感じて、口を離す。

「……まじい」
「喫煙者の唾液だからなあ」
「飲ませるんじゃねえよ、趣味悪ぃなあ」
はは、と笑って裸の胸に舌を這わせる。
くっつき合う素肌が気持ちいい。
そう言えば、と思い出してベロ、と首筋を舐める。
「ぅひゃ！？」
空いた手で背中の下の方を撫でる。
「ひぁっん……やだ、くすぐった……」
拷問で暴かれてた性感帯を責めてやる。
「あぁっ……も、俺ばっか……」
恥ずかしさに身体をピンクに染めた霊幻がぐいっと俺を押して起き上がり、股間に顔を埋めて来る。
「ん……」
ペロペロと俺の性器を舐めていた霊幻が口の中に含んでゆるゆると刺激する。
「……へたくそ」
じれったい。俺は抗議しようとした霊幻の後頭部を掴んで、がっとイラマさせた。
「おごっ！？」
がっ、とかごほ、って苦しげな声を上げる霊幻を眺めながら、安い満足感に酔う。
「〰〰〰っ、おっまえな、噛むところだったぞ！！」
やっと解放された霊幻が涙目で咳き込みながら抗議してくる。
「別にいいぜ」
「……マゾなの？」
「ちっげーよ。スパイがセックスするって時は、舌を噛み切られたり、ちんこ噛み切られたり、そうされてもいい相手としかしない、ってことだよ」
重てえだろ、ビビれ、ばーか。
「ふうん」
でもただ霊幻は嬉しそうに微笑むだけで、拍子抜けした。
「勃ったし、挿れるか？」

「ん、ああ、そうだな」
コンドームの箱をせわしなく開けて、ゴムを付ける。
霊幻はうしろをローションでほぐしていて、枕を腰の下に入れていた。
「準備できた？」
「ああ」
足を広げて横たわる霊幻の窄まりに、ぐっ、と性器を押し付ける。
「あっ」
ぬぼ、と先端が入った。締め付けがかなりキツい。
「あっ、あっ」
ぐ、ぐ、と腰を進めると、苦しそうに霊幻が声を上げる。
「ぅあっ！？」
性器が半分ほど入ったところで、霊幻が困惑した声を出した。前立腺ってやつか？
「ここ気持ちいいか？」
その深さで何度も揺さぶる。
「ぅあっ、うん、うんっ」
必死に何度も霊幻が頷く。
俺は霊幻の性器を擦ってやりながら、何度も前立腺をえぐる。
「あ、あ、あ、イく、よしふ、よしふ」
びゅく、と霊幻の性器から欲望の証が吐き出される。
うねる内部に好都合、と俺はズン、と腰を進めた。やっと全部入った。
「い……った」
霊幻が冷や汗を流してギョッとする。
「も、っと……ゆっく、り……っつ、う……」
「オイ大丈夫か？処女みてえな反応になってんぞ」
ぎくり、と霊幻の身体が跳ねて察してしまう。
「……バレた？」
ちょっと待て。
「お前な、初めてなら初めてって言えよ！」
「いやだって、お前、俺が処女だって分かったら抱かなかっただろ」

大正解だ。慣れてるっぽいから流されたのである。そうじゃなかったらこんな超能力者の教祖みたいになってる男に手なんて出すかよ、恐ろしい。
「気にすんなよ、俺が抱かれたかったんだからさ……っん、慣れてきたかも」
ゆる、と霊幻自身が腰をゆらして、甘い痺れが走る。
「なあ、めちゃくちゃにしてくれるんだろ？」
ぷつ、と理性が切れる音がして。
「あ、あ！んぁっ、う、はぁっ！」
後は綺麗な金糸がシーツで乱れるのを見ながら、腰を振った記憶しか残っていない。

※

シガーキスで霊幻のタバコに火をつけてやる。
「はー、すっきりしたわー。ありがとな、ヨシフ」
「……おう」
処女、処女、こいつの処女を奪っちまった。俺はセックスが終わったら、それしか考えられなくなっていた。
ヤバい。
めちゃくちゃ嬉しい。
でも……。
「どーしたよ、まだ処女のこと気にしてんの？」
うつ伏せのままタバコをふかす霊幻にドキリとさせられる。
「気にすんなって。男の処女なんてあって無いようなもんだろ。それとも」
タバコを指に挟んで、ふわりといたずらっぽく霊幻が笑う。
「責任取ってくれんの？」
その言葉に心臓が跳ねる。
「なーんてな、冗談冗談」
「……取っていいのか」
俺のその声は余りに小さくて、霊幻の笑い声にかき消されてしまった。

「へ？なんか言ったか？」
「……いや」

それから何度も胸糞案件の度に肌を重ねて。

俺は流石にけじめをつけたくなって、……いや、彼を独り占めしたくなって、霊幻をこの高いバーに呼び出した訳だ。

「霊幻、これを受け取って欲しい」

指輪を差し出すように、シガレットホルダーを取り出す。

「俺と付き合ってくれ。仕事で日本にいないことも多いけど……いつでも、お前の事を想ってるから」

きょとん、と霊幻はその純白の筒に金の装飾具が付いたシガレットホルダーを見て。

「ばかだなあお前、俺なんかに引っかかって」

苦笑して手に取る。

霊幻はシガレットホルダーにタバコを差し込んで、一服ゆっくりと吸う。

その姿は思ってた通り、絵になっていて。

「……いいよ。お前が日本に帰ってきたら、『おかえり』って言ってやるよ」

「やっ……た！」

俺は思わずガッツポーズをする。

「おい、やめろよ、恥ずかしい」

霊幻が止めるが、知った事じゃない。お前を独占できる。それがどれだけ嬉しいことか、きっとお前自身には分からないのだろうから。

※※※※※※

「あれ？コレどうしたんですか、師匠」
事務机にポンと置かれていた細工のいいシガレットホルダーを茂夫が何気なく手に取る。
「珍しいですね、こういうの買うの……あれ」
ホルダーをまじまじと眺めていた茂夫が眉をひそめる。
「『ヨシフ　ｔｏ　アラタカ』……これ、あの役人さんからのプレゼントですか？」
「え？それそんなの彫ってあったの？」
霊幻が狼狽する。彼は気付いていなかった。
「師匠」
にっこりと笑う茂夫の目が笑っていない。

「ヨシフさんに僕たちお話があるんですけど」

続